

ふるさと 見て歩き

第128回

きたとみた おおうるし
北富田の大漆

「北富田の大漆」は、平成29年に市の天然記念物に指定された木です。

この場所に行くには、諸沢地区にある「三太の湯」を右手に見つ直進し、二股道を左に行きます。さらに道なりに進むと、バス停のある三叉路に行きあたります。大漆は、その左手の山の斜面にあります。

樹高14m、幹周り2.2mほどの大きさで、同じ市指定の天然記念物のケヤキや杉の木と比べると、「大木」とは呼びにくいかもしれませんが、「ウルシの木」としては非常に稀な大木です。少なくとも、確認されている市内および近隣市町村では最も大きいですし、岩手県一戸町指定「越田橋のウルシ」や、秋田県湯沢市や福島県柳津町のウルシといった、巨木と呼ばれるものと比べても遜色がありません。

栽培種であるウルシは、漆掻き等が済むと処分されてしまうため、大きく生育する事例は少なく、巨木自体が貴重なのです。

土地の方の話によると、昭和20～30年代には、すでにこの大ウルシは所在しており、当時この木はすでに相当の大きさで、漆掻きが行われていたということから、この時点において樹齢15年以上はあったであろうことは推測できるため、80～100年近い樹齢の可能性もあります。

この木が立つ場所は、北向きの斜面で、耕作に不向きな土地であったため、付近の畑の耕作が放棄され、この木も同じく放置されたそうです。周囲に高い樹木がなく、直下に彦沢川が流れて適度に湿気があることなど、好条件が重なったことから、この木はここまで生育したものと考えられます。

常陸大宮市を含む茨城県北西部は、江戸時代に水戸藩が産業振興のためウルシ栽培を奨励し、現在でも漆の産地として知られている地域です。

常陸大宮市と大子町は、岩手県浄法寺に次ぐ国内第2位の漆の産地で、透明度が高く、非常に高品質なものが産出されるため、高級漆器の仕上げ用として、高い評価を受けてきました。

市内で、山方地域の特産物というと、どちらかといえば蒟蒻や西の内紙・楮が知られていますが、漆も、現在まで引き継がれている重要な特産品です。

過去に編さんされた『山方町誌』では、諸富野地区で明治41年に2,100本の木からウルシが収穫されたと

いう記載があるのみで、以降の記載はありませんが、山方地域では、現在も各所でウルシ畑を見ることができます。特に、家和楽地区の周辺では、国道からでも、樹液が真っ黒く垂れている木々が確認できます。

山方地域のみならず、市内の各所で漆掻きが行われていましたので、川岸や人がよく通る道の脇等に、ひょっこりと、漆掻きの古傷が残された木を見かけることがあります。大きめのウルシの木を見かけたら、幹を良く確認して見て下さい(もちろん近づきすぎて、かぶれてしまわない様に注意して!)。30年以上の木は、高確率で漆掻きの跡があります。

人をかぶれさせてしまうが為に、何かと嫌われがちなウルシですが、旧石器時代は接着剤として、縄文時代には既に器の塗装に使用されていたという、数万年もの間、日本人とともに文化を形作ってきた存在でもあります。

「北富田の大漆」は、樹木としての規模、貴重さだけでなく、地域の歴史的環境、地域の産業のシンボルとしての価値を持つのです。



▲北富田の大漆

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ

☎52-1111(内線344)